独立不羈の鉄道王

根津（ねづ）　嘉一郎（かいちろう）（1860－1940）

東武鉄道ほか

根津美術館所蔵

§人物データファイル

出生

万延元年６月15日（1860）甲斐国山梨郡正徳寺村（現・山梨市正徳寺）に、根津嘉市郎の次男として生まれる。幼名は栄次郎、のち隆三、兄に代わって家督を継ぐときに嘉一郎と改名。生家は農業のほかに種油製造、雑穀商、質屋を兼ねる名家で、屋号を“油屋”といった。

生い立ち

幼少時から腕白で負けず嫌いのがき大将で、村の寺子屋で学んだ。父の嘉市郎は弟とともに起こした訴訟により財産を費し窮迫したが、他人からの援助を辞退し、自らの勤勉努力によって家を建て直した。曰く「人間というものは他人の恩になれば一生頭が上がらないものだ」。根津は後年「私は人の世話をするとも『努めて人の世話になるな』という事を一つの信条にしている」と語っている。

明治10年（1877）東山梨郡役所の書記になる。しかし、月給２円のためにこつこつと働くことは根津の性格に合わなかった。

実業家以前

明治13年（1880）軍人を志し上京するが、年齢制限のため陸軍士官学校に入学できず、漢学者馬杉雲外（ますぎうんがい）と古屋周齊（ふるやしゅうさい）の書生になる。３年後帰郷し、病弱の兄に代わって家督を継いだ根津は、明治17年（1884）大蔵省官吏の村上知彰の六女・久良と結婚。家業の傍ら地方政治にも関わっていく。

地方政界で活躍していた頃、根津は甲州財閥★の大御所・若尾逸平や雨宮敬次郎と親交を深める。やがて若尾の影響を受けて株式投資に没頭するようになり、明治30年（1897）家督を兄に譲渡して東京へ移住する。

実業家時代

根津が実業家の道を歩む契機になったのは、甲州財閥の雄、雨宮敬次郎から「相場で一時の利を追うよりも事業を経営し、事業を盛り立ててその利益を享受することにせよ」という助言を受けたことである。

明治31年（1898）徴兵保険株式会社取締役、翌32年には房総鉄道取締役、東京電燈監査役、帝国石油社長に就任し、以降、数多くの会社役員を兼務することになる。根津が経営に関わった企業は鉄道だけでも20社以上にのぼり、「鉄道王」と呼ばれた。

根津は倒産寸前の会社の株を買い集めたので「ボロ買一郎」と陰口を叩かれた。経営難に陥っている企業の株主となって経営に参画し、その会社を起死回生させるのが根津の得意とする手法であった。その代表例が東武鉄道である。

東武鉄道は明治32年（1899）の開業以来「東武鉄道空引会社」と揶揄されるほど業績不振に苦しんでいたが、同社の株主だった根津が経営陣の要請を受け、明治38年（1905）社長に就任する。

根津はのちに「私が最も渾身の力を尽くしたのは、東武鉄道の整理に関してである」と述懐している。「内に消極、外に積極」の経営理念のもと、冗費削減を徹底し、高利の借入金償却等の社内改革・整理を図る一方で、明治40年（1907）には周囲の反対を押し切り工事費40万円を投じて利根川架橋建設を断行し、積極的な路線延長を行うことによって東武鉄道の再建に成功した。また根津は日光・鬼怒川温泉の開発や工場の誘致など、鉄道沿線に関連事業を興し、沿線地域の産業振興にも尽力した。さらに東武鉄道は佐野鉄道や太田軽便鉄道など周辺の中小民鉄を吸収合併し路線を延ばしていく。「鉄道は延長しなければ収益は挙がらぬ」というのが根津の持論であった。

根津は持ち前の不撓不屈の敢闘精神いわゆる「負けじ魂」をもって事業に取り組んだ。鉄道以外に日本麦酒鉱泉（現・アサヒビール）や富国徴兵保険（現・富国生命）をはじめ、電力、石油、製粉、紡績など多岐にわたる事業を手掛け、大正９年（1920）設立された根津合名会社（根津コン

ツェルン）の土台となっている。

明治39年（1906）馬越恭平は日本のビール業界を統一すべく、丸三麦酒の買収を目論んでいたが、このことを知った福沢桃介に誘われて、根津は馬越に先制して丸三麦酒の株を買い占めてしまう。福沢が自分の株を根津に売り渡して手を引いたため、根津は不本意ながらも丸三麦酒の経営に関わることになる。

これを機に根津と馬越の間には感情的確執が生じ、根津の丸三麦酒改め加富登（かぶと）麦酒は、業界最大手の馬越の大日本麦酒を相手に熾烈な販売競争を繰り広げる。加富登麦酒は大正10年（1921）三ツ矢サイダーを製造する帝国鉱泉及び日本製壜と合併して日本麦酒鉱泉と改称する。同社は合併により販売網が拡大し、２つの新工場の建設や、王冠１個を３銭で買い取るというキャッシュバック方式を採用して善戦した。昭和８年（1933）馬越の死去により、根津が大日本麦酒との合併を承諾し、約30年に及ぶビール競争に終止符が打たれた。

富国徴兵保険は、兵役に就いた加入者に保険金を給付することを目的に大正12年（1923）設立された相互会社である。根津は、徴兵保険は国家的事業であり、株主優先の株式会社にそぐわないと考えていたため、相互扶助を目的とし、保険契約者が会社の構成員となる相互会社としたのである。６月に設立の認可が下り、基金の払い込みを９月１日としたが、まさにその日関東大震災が発生。社会経済は混乱し、創業自体が危ぶまれたが、根津の決心は微動だにしなかった。基金の未払い分は自分で立替え、９月８日には設立総会を開いた。その後の度重なる恐慌による不況にもかかわらず、富国徴兵保険の契約高は年々逓増し、根津が亡くなる直前の創業15周年にあたる昭和14年（1939）末には契約数150万件、契約高は10億円に達するのである。

政治との関わり

明治22年（1889）平等村会議員、明治24年（1891）東山梨郡会議員のち山梨県会議員に当選。明治26年（1893）には平等・上万力組合村の村長を務めた。明治37年（1904）衆議院議員に初当選し、以後４回当選している。

大正15年（1926）貴族院議員に勅選された。

社会・文化貢献

明治42年（1909）渋沢栄一を団長とする渡米実業団の一員として４ヵ月にわたるアメリカへの視察旅行に参加。石油王ジョン・ロックフェラーとも対面し、私益を顧みず電車、電話、水道等の公共事業への投資を惜しまない米国の資産家の愛郷心に大いに感銘を受ける。

根津は「自分は子孫の為に美田は買わない。国家社会の為自分でなければ出来ないことに寄与する」と語った。生前根津が尽力したのが教育事業であり、根津の遺志を継いで設立されたのが根津美術館である。

「国家の繁栄は育英の道に淵源するところが多い」と信じ「現在社会の為に尽す事としては、教育事業に奉仕するよりほかに道がない」という考えから、根津は大正10年（1921）360万円を寄付して財団法人根津育英会を設立し、翌11年には現在の東京・江古田に日本初の７年制高等学校である武蔵高等学校（現・武蔵大学）を開校した。

根津は若くして熱心な書画骨董の蒐集家であった。国宝に類する貴重品が外国人に安く買われていることを危惧した根津は、東洋美術の欧米への流出を防ぐために、個人の趣味という枠をこえて、幅広く古美術品を蒐集していく。そのコレクションは根津の死後、昭和16年（1941）より東京・青山の邸宅を根津美術館として、一般に公開されている。収蔵品は書蹟、絵画、彫刻、陶磁器、金工品、漆工品等で、「那智瀧図（なちのたきず）」「燕子花図（かきつばたず）」などの国宝７点を含む約７千点。約６千坪の広大な日本式庭園は、都心のオアシスとなっている。

晩年

昭和14年（1939）11月、国際親善使節として南米に旅行した根津は、風邪をこじらせ、熱海の別荘で静養していた。帰京後12月20日から青山の自宅で年末恒例の茶会を開催したが、５日目の25日に病床に臥し、翌15年１月４日永眠した。享年79歳。東京・多磨霊園に葬られた。

関係人物

若尾逸平　根津は山梨県会議員時代から同郷の先輩で後に甲州財閥の巨頭と呼ばれた若尾逸平と交流があった。若尾の「金儲けは発明か株に限る。発明は学問がなければ容易なことではない。株は運と気合だ。若し株を買うなら将来性のあるものでなければ望がない。それは『乗りもの』と『あかり』だ。この先、世がどう変化しようとも『乗りもの』と『あかり』だけは必ず盛んにこそなれ、衰える心配はない」という言葉に啓発された根津は、実際に鉄道株や電力株に投資して資産を増やし、株主兼役員として事業経営に携わっていく。

エピソード

根津は社会に無神論に基づく唯物主義が蔓延し、人々が私利私欲に走っていることを憂えていた。そこで、宗派を超えた仏教による思想善導が必要と考え、昭和10年（1935）現在の埼玉県朝霞市に８万坪の土地を得て、大寺院の建立に取りかかった。しかし戦時供出のため大釣鐘と大仏像を失い、根津の死去により建立計画は頓挫してしまった。

また、根津は狩猟が好きで立派な鉄砲と猟犬を自慢していたが、腕はあまり良くなかった。猪狩りに行けば、猪が人間の声に敏感であるのに、大声を出して獲物を逃がし、鴨猟に行けば、１羽見つけると狙いを定めず発砲するので獲物を皆逃してしまったという。

キーワード

甲州財閥　明治20年代から昭和初期にかけて財界で活躍した山梨県出身の実業家グループ。主要人物は若尾逸平、雨宮敬次郎、小野金六、根津嘉一郎など。彼らの多くは横浜開港に伴い甲州商人として生糸等の輸出入を手掛け、または株式投資によって資産を形成した。鉄道事業と電力事業は甲州財閥の二大支柱であり、明治20年代後半から明治30年代にかけて甲州財閥系の人々がこぞって東京馬車鉄道をはじめとする東京の市内鉄道会社と東京電燈（現・東京電力）の株を取得し、役員に名を連ねていた。

神奈川との関わり

明治41年（1908）東神奈川－八王子間で開通した横浜鉄道及び明治37年

（1904）神奈川－大江橋間で開通した横浜電気鉄道の取締役にそれぞれ明治45年（1912）、大正４年（1915）に就任している。

また、根津は大磯に別荘を所有していた。地元の小学校に金200円を寄付している。根津の生家跡に建てられた根津記念館の庭園には、根津の大磯の別荘から移植された「大磯の松」が保存されている。

§文献案内

著作

『世渡り体験談』根津嘉一郎著　実業之日本社　1938〈未所蔵〉

晩年に刊行された根津の回想録。

社史

『東武鉄道６５年史』東武鉄道編　東武鉄道　1964〈Y、K〉

全３部から成る。第１部は日本の私設鉄道の発展、第２部は東武鉄道の歩み、第３部は合併及び系列会社の概要。第２部第７編第２章「歴代の役員」に根津の略年表あり。

『写真で見る東武鉄道８０年史』東武鉄道編　東武鉄道　1977〈Y、K〉

『東武鉄道百年史』東武鉄道社史編纂室編　東武鉄道　1998〈K〉

『Ｒａｉｌｗａｙ　１００　東武鉄道が育んだ一世紀の軌跡』東武鉄道編　東武鉄道　1998〈Y、K〉

『富国生命五十五年史』富国生命保険編　富国生命保険　1981〈K〉

『南海電気鉄道百年史』南海電気鉄道株式会社編　南海電気鉄道　1985〈K〉

『Ａｓａｈｉ　１００』アサヒビール株式会社社史資料室編　アサヒビール　1990〈Y、K〉

伝記文献

『根津嘉一郎』宇野木忠著　東海出版社　1941〈K〉

『根津翁傳』根津翁伝記編纂会編　根津翁伝記編纂会　1961〈Y、K〉

根津夫人をはじめ根津と関係のあった人々の談話を交え、多面的に根津の一生を描いている。

¶参考文献

「根津嘉一郎編」『財界人の教育観・学問観（財界人思想全集７）』鳥羽欽一郎編集・解説　ダイヤモンド社　1970　p191-212〈Y、K〉

「東都の鉄道王　根津嘉一郎と五島慶太」『茶道文化史（原田伴彦著作集３）』原田伴彦著　思文閣出版　1981　p329-341〈Y〉

『近代数寄者太平記』のうちの一編。

「根津嘉一郎と東武鉄道会社の経営再建」『産業革命期の地域交通と輸送』老川慶喜著　日本経済評論社　1992　p342-361〈Y〉

『武蔵七十年史　写真でつづる学園のあゆみ』武蔵学園70年史委員会編　根津育英会　1993〈Y〉

『武蔵七十年のあゆみ』武蔵七十年のあゆみ編集委員会編　根津育英会　1994〈Y〉

『資料・根津嘉一郎の育英事業』武蔵学園記念室編　武蔵学園記念室　2005〈Y〉

「根津嘉一郎　人物文献目録（鈴木勝司編）」所収。

『地方財閥の近代　甲州財閥の興亡』齋藤康彦著　岩田書院　2009〈Y〉

『根津美術館百華撰』根津美術館学芸部編　根津美術館　2009〈Y〉

＜田中晃子＞